
 卷 頭 言

武道と医療



テレビ東京取締役会長

 一 木 豊

剣道の達人としておなじみの宮本武蔵、柳生十兵衛が晩年に詠んだ歌がある。「理もわけも尽くして後は月明を、知らぬ昔の無一物なり」(武蔵)「なかなか人ざと近くなりけり、あまりに山の奥をたずねて」(十兵衛)というもので、剣の道を究め尽くした境地を詠んだものである。昭和の剣聖と云われた持田盛二は十段、七十五歳のときに「剣道は先ず技に習熟し、次に気を練り上げ、更に間合が明るくなり、最後は案山子のようにただ独り立っているだけでよいのだが、この“ただ独り立っている”ところまで行く修行は容易なものではない」と語っている。前二歌の解説のような言葉であり、剣の究極、達人の境地は時代を経ても変わらないものだとして改めて感心する。

先の両歌の下敷きには「禅」の心がある。禅に「廬山は煙雨浙江は潮、未だ至らざれば千般恨み消えず。至り得、帰り来て別事なし。廬山は煙雨、浙江は潮」という有名な語がある。只管打坐の修行を果し戻ってきた自分を取り巻く環境は修業に出る前と何ひとつ変わっていない。しかし今の自分は、過去の小さな自己を捨て、自然と調和し、何があっても微動だにしない心身を持った自己である。この澄み切った境地を“別事なし”といっている。持田の「独り立つ案山子」だ。剣と禅は究極において同じ哲理に通じている。

近年、武道の稽古に通う外国人が多い。日本伝来の武道がもつ精神性に魅力を感じてのようだが、人を殺す剣と、人を活かす禅との結びつきがどうもピンとこないらしい。剣をとって立ち会うというのはまさに命のやりとりである。身の安全を含めてあらゆるかけ引き、技を駆使しなければやられてしまう。ところが実際の上ではそうしたことを考えているとどこかに隙が生じる。余計なことを考えればそこに心がとまり、とまったところを電光石火、相手に打たれるから、この際どい間際に自分を忘れ、身を捨てなければならない。剣にとどまらず、すべてにわたってこの人間心理の機を悟らせようというのが禅である。

自分を捨てるとは至難の業で、われわれ凡人がそこに到達することは不可能に近いが、そこが武道のもつ奥深さであり、技術上の勝敗を競うスポーツと違う所以である。剣禅一如の「無刀流」開祖、山岡鉄舟は死病の痛にとりつかれても泰然自若、最後は座禅を組んだまま大往生を遂げた。医学の進歩は早く、“不治の病”はなくなったが、どんな治療を受けるにせよ、最後にものを云うのは病魔と真っ向から戦おうという患者の気迫と、物に動じない平常心であると思う。

一木 豊 先生 略歴

昭和 32 年 3 月 早稲田大学第一政治経済学部卒業

昭和 32 年 8 月 日本経済新聞社入社

ワシントン支局長 政治部長専務取締役歴任

平成 8 年 6 月 テレビ東京代表取締役社長

平成 13 年 6 月 テレビ東京代表取締役会長